

# 浦賀文化

平成19(2007)年7月1日

第11号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

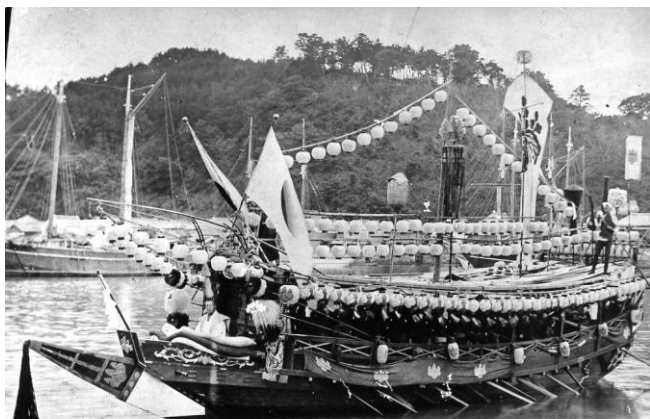
編集・発行:横須賀市浦賀文化センター(郷土資料館)

〒239-0822 横須賀市浦賀 7-2-1

TEL&FAX 046-842-4121

## うらがの寫眞館

### 洲崎町の御座船



洲崎の御座船 (宮井宣行氏蔵)

この写真は明治時代の終わり頃、東浦賀の鎮守様の本祭での洲崎町の御座船である。船縁には「ほおずき提灯」を飾り、船先には袴を着けた世話人が座布団を何枚も重ねた上に座り、扇子で合図をおくっていた。船には囃子方が乗らないので、音頭にあわせて船唄を歌って海を渡った。伝えによると御船には、新井にあった朱塗りの女船、洲崎にあった黒塗りの男船があったという。大正年間の台風で船は壊れてしまい、船体で使用されていた物や、江戸時代終わり頃の立派な彫り物は、船をかたどった洲崎町の山車の屋台として現在も使用されている。

浦賀は徳川幕府開闢以来、幕府直轄領として徳川家に仕えてきた町でした。明治維新後、急速な変化の中にも落ち着きを取り戻してきたところでの明治天皇の初めての臨幸に浦賀の人々はどのような歓迎をしたのでしょうか。

『浦賀中興雑記』によると、「到着と同時に浦賀港に停泊中の軍艦から祝砲が発せられた。東浦賀では歓迎の地引網が行われ、西叶神社の前には棧橋が架設され、鳥居の周辺は、礼服・羽織袴の戸長・議員・役場吏員および西岸学校の教員・児童、屯営の兵士、また、歓迎の人々で

立錐の余地もないほどであった。小休止後、再び馬で観音崎に向かわれ、途中鴨居の素封家・高橋家に寄り、建設中の観音崎砲台を視察された。視察が済むと、新たに普請し砂利を敷いた道を馬で東浦賀を通り、宿泊地である横須賀に向かわれた。大ケ谷町の両側の通りには、戸長・議員・役場吏員約八百名が並んでお見送りをした。」とあります。

この一日の記録から、不始末のないようにという大変な気の遣いようが読み取れます。西岸学校で休息の際お茶をすすめたのが、幕府の急先鋒であった会津から浦賀に明治三年に移り住んだ方であったのはめぐり合わせの不思議でしょうか。

この行幸に協力した浦賀町に下賜金として百円が贈られ、鴨居・大津・豊島村、架設棧橋・道路の普請にも下賜金がありました。明治四(一八七二)年五月十日に制定された新価条例(最初の金本位制・旧一両を二円とする)から十年、現在ではいかほどの金額になるのでしょうか。

また、砲台建築に従事していた人々にお酒を振舞われた記録もあります。明治天皇が横須賀で親しく庶民と接しられたことも伺えます。

五月に咸臨丸フェスタが行われ、今年には市制施行百周年ということで、浦賀で建造した三隻の大型帆船が入港し、久しぶりに浦賀港が港らしく見えました。やはり港に船がないというのは、わさびのない刺身のような、どこか間のぬい知らされました。

そういえば、横須賀市は「海の手文化都市」という横須賀市がめざす新しい都市像とする基本構想を持っているのです。「海の手文化都市」に最もふさわしい港は歴史や文化がある「浦賀港」ではないでしょうか。浦賀の発展は港があつたからこそであり、港が生きてくれば、浦賀が活気あふれる町になるのではないのでしょうか。これから浦賀港をどう考えようか、いっしょに考えてみましょう。(山本)

## 『明治天皇駐蹕の碑』

ちゅうひつ

### 当時の歓迎の様子

西叶神社の社務所のほぼ正面に「明治天皇駐蹕之跡」と刻まれた石碑があります。高さ二五七cm、幅四二cm、奥行一五cmの花崗岩の石碑です。どのような歴史が刻まれているのでしょうか。

西南戦争、明治十(一八七七年)が終わり世の中が落ち着き始めた明治十四年五月十八日、観音崎砲台視察のために明治天皇が横浜から浦賀港へ十二時三十分に着かれ、架設の棧橋に降りるとすぐに乗馬され、そのまま西岸学校に入り小休憩をとられています。

明治四年、西叶神社境内に置かれた西岸学校は、当時としては珍しい全教室にガラス窓のある洋風の学校で、小休憩に使用された教室と建物は地元の人々から郷土の誇りとして大切に保存されてきました。しかし、大正

十二年の関東大震災で損傷を受け、大正十三年四月一日浦賀小学校の校舍新築落成とともに建物を解体せざるをえなくなりました。

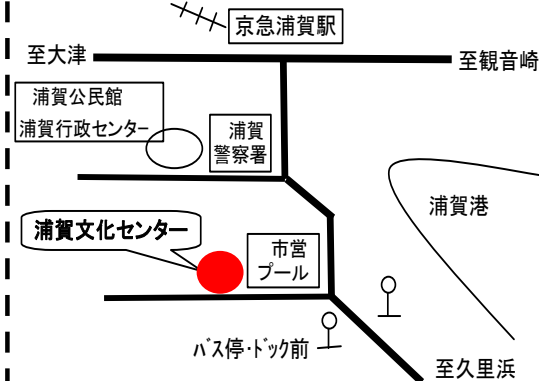
教室・建物が消えてしまうことを憂えた浦賀の人々は記念碑建設を提起し、小休憩を取られた教室のあった位置に石碑を建てました。除幕式は、昭和三年四月一日。題字は、当時の明治神宮宮司であり陸軍大将でもあつた二戸兵衛の揮毫です。



西叶神社社務所前に立つ「明治天皇駐蹕之跡」と刻まれた石碑

## 浦賀文化センター (郷土資料館)

浦賀駅から徒歩10分



所在地:横須賀市浦賀7-2-1  
電話: 046-842-4121  
FAX:

## 東西風

五月に咸臨丸フェスタが行われ、今年には市制施行百周年という

広報紙『浦賀文化』は、市役所、各行政センター、公民館、浦賀病院、一部の小学校、中学校、高校の図書館などに置いてあります。



浦賀の植物

シナノキ シナノキ科

大前悦宏  
神奈川県植物誌調査員

今年の五月初旬、浦賀小学校の四年生百十名余りの子ども達に樹木の観察とお話をする機会がありました。そのおり体育館のそばに、浅い緑色で柔らかく美しい緑葉、あまりにもきれいな鮮緑色のシナノキの新葉があらわれました。心が騒ぎました。というのも、県植物誌二千年には三浦半島での記録がなかったからです。県内には丹沢山地や箱根の落葉樹林帯に自生がみられる神奈川県における分布型はミズナラ型とされていました。

まさか浦賀小に？。なによりも大事に育て見守りたい樹木のひとつといえるでしょう。

シナノキの英名は、Japanese Linden りんでん。「泉にそいて、茂る菩提樹の歌の菩提樹をりんでんという。しかし菩提樹はインドのイチジク科の常緑樹のことをいい、またお釈迦様が悟りを開いた聖木はクワ科イヌブナ属のインドボダイジュをいいます。シナノキの葉の形がよく似ていることから名前もボダイジュと呼ばれるようになってい

尖り、葉縁は鋭い鋸歯があります。葉裏の脈液だけに柔らかな赤褐色毛が密集している姿が見られます。語源はアイヌ語の「シナ」樹皮がシナシナすることから、くくる、結ぶの意味。用途としてベニヤ材、わりばし、マッチの軸、アイスクリームのへら、船のロープ、密源植物(風邪にも効く「バシキール」の蜜峰)は有名。熊の木彫りもおおかたがシナノキ材。

さて、開花は六〜七月、雌雄同株で両性花、二十〜四十くらい淡いクリーム色の花を集散花序につけます。甘いレモン様の香りが辺り一面に広がります。

花序は特徴ある形で花柄に「へら状の葉」がついていますが花序全体についている苞葉なのでこれを総苞といいますが花をつける枝(花序)の付け根にある葉(総苞)が途中で合着したものと見えま

す。十月ころ灰褐色で球形の果実は総苞と共に落ち、舟の帆のような目で果実を散布します。果実をヒワ、レンジヤクが好み食べます。葉は歪んだ心円形をしており先は尾状にのびて急に



浦賀小学校のシナノキ



クリーム色のシナノキの花

【笑話一題】

『浦賀のスポット』でインターネット検索中に【浦賀郡】という文字が目に入り「おや！」と思いアクセスしてみると、北海道の日高地方に【浦賀郡浦賀町】があるというのです。更に「札幌地方裁判所浦賀支部」と「北海道浦賀労働基準監督署」も存在しました。管轄が浦河町役場となっているので問い合わせたところ(浦河)の間違ひではないかとの回答でした。単なる変換ミスとは思えないのですが……。あわや北海道に姉妹地域が中島町に加え、もう一カ所誕生と思いきや肩透かしを食ったようで残念です。こんなことってあるんですね。

蔵書

★ もはや堪忍成り難し

(自由民権史・島本仲道と三浦の仲間たち) 岸本隆巳・酒井一監修 叢文社

大塩平八郎、江藤新平、島本仲道。そして、知られざる三浦半島の民権志士たち。現代日本人のほとんどは彼らの義憤が理解できない……何故？

★ 江戸と上方 人・モノ・カネ・情報

歴史文化ライブラリー112 林 玲子 吉川弘文館  
流通からみた近世の社会変動！江戸と上方の商人・商品・資本・情報の流れを山城屋、白木屋、越後屋などの活動から生き生きと描く。商品流通を発展させた商人たちの姿は、現代にも多くのヒントを与える。

市制100周年記念 咸臨丸フェスティバル

浦賀ドックへ里帰りの帆船(平成19年5月12〜13日)



展示室情報

干鯛で栄えた浦賀。商家の店先の写真、そして店先の定番(帳場格子・机、大福帳、火鉢、竿秤・金枴等々)、さらに「覚」(干鯛・浦高札の立て札。当時の様子が垣間見えます。皆様のご来館をお待ちしています。

村役人の就任



天保三(一八三二)年二月二十日、東浦賀の名主・年寄役が羽織・袴の礼装で、そろって奉行所へ向っていた。村役人がそろって奉行所へ出向いたその理由は、空席になっていた年寄役に石井八右衛門を東浦賀村として推せんし、これを奉行所に認めてもらうためであった。浦賀奉行所が設置されてからは、東西浦賀の名主や年寄役等の村役人はすべて奉行の認可が必要であった。奉行所では、まず玄関で役人に、事前に書状で連絡してあった趣旨のことで来訪したことを告げ、奉行への取り次ぎを依頼した。まもなく奉行からの呼びびがあり、名主(この時は病気で欠席)と先輩年寄役は玄関を上がり、当事者の八右衛門は敷台へ上がった。ここで奉行から就任を認める言葉がある。

この時、奉行所サイドは奉行の秘書官的な役目をする「用人」、奉行の身辺警護をする「目付」、与力組と同心組の月番、奉行所で事務的な仕事を司る「封印役」がそれぞれ所定の位置についている。奉行の言葉は「村役人としての務めに励みなさい」という趣旨の簡潔なものであるが、この後諸々の取り決めを用人が読み聞かせ、最後に村役人としての誓詞を述べてこの式は終了する。しかし、これで奉行所を後にする訳ではなく、就任を認めてもらった御礼と就任挨拶をして回るのが慣例となっていた。もちろん、言葉だけというわけに

歴史 語り座・浦賀

郷土史家 山本 詔一



石井八右衛門の屋敷があった現在の中通り